
茶山びよの18きっぷ旅～2006年夏～

茶山びよ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

茶山ぴよの18きっぷ旅〜2006年夏〜

【Nコード】

N9087A

【作者名】

茶山ぴよ

【あらすじ】

私、茶山ぴよが青春18きっぷを使って、まじであてどのない旅というものをしてみた4日間のエッセイ。

1 出発（前書き）

自己満足いっぱいのエッセイです。どうもすみません。

1 出発

<青春18きっぷとは>

JRの普通（鈍行）列車を1日乗り放題という切符。夏、冬、春の限定品。

5回（5日）分で11500円。

金はないけど暇はあるという人に打ってつけともいえるが、宿代を考えると逆に高くつくかもしれん。

~~~~~

九州・福岡市から北海道・札幌までまる2日（といっても3枚使ったが）かけて行ったあの夏ももう遠い。

6時に博多駅を出て、鹿児島本線、山陽本線と乗り継ぐ。正午ごろに広島に着き、夕方に大阪に着いた。

そして今もある、大垣発の夜行普通列車の窮屈なシートの中で1枚目の有効期限が終了。

4人がけに4人座った状態では、ほとんど寝れず、寝ぼけまなこでほとんど覚えていない東京駅。

2日めは、山手線で上野へ、そして東北本線を北上し、仙台、盛岡へ。

このあたりで、同じように18きっぷで北海道を目指す男の子たちと仲良くなった。

青森に到着し、まだあった青函連絡船に乗り込んだところで2枚目の期限が終わる。

北海道の早い朝ぼらけ、九州とは違うひんやりとした空気に歓迎されて、函館の港を踏む……。

あれから20年近くの歳月が経つが、私の中ではまだ去年の夏ぐらの鮮やかさで記憶に残っている。

あの頃は……廃止が決まっていた青函連絡船があった。

青森・盛岡間も『青い森鉄道』ではなかったので18きっぷが使えた。

そんな思い出話を、某編集部で話したら

「さん、鉄オタだったんですか!」

と驚かれてしまった。

「やだなー。鉄オタなんて。最近は『乗り鉄』<sup>のりてつ</sup>っていうんですよ!」

「乗り鉄？」

乗り鉄を知らない彼に、私は稲庭うどんをおごってもらいながら、  
『乗り鉄』とは、

鉄道の車両を撮影するために駅でカメラを構えて虎視眈々と待った  
りしないし、

車両の『キハ』だとかそういうのにも詳しくなくて、

純粋に『鉄道に乗って旅するのが好きな人』のことだと説明した。

福岡出身、と同郷の彼は

「そうか、乗り鉄か」

としきりにメモしていた。おかげで、鉄道特集の仕事を5Pももら  
えたので、ラッキーだったのだが。

その鉄道特集の取材で乗ったJRの旅がよかった。

ひさびさに乗った田舎の鈍行は、手が届きそうなところに緑、まさ  
に万緑といった風情の中を走った。

列車と併走するように風がわたっていくのが、波打つ青田でわかる。  
そして各駅に停車するたびに、むせるような夏草の匂いが乗車して  
きた。

むせるような人いきれの乗車に慣れた私に、その新しい畳に似た香

りは、急激に思い出を連れて来た。

それは18きつぷで旅した学生時代の……

山陽本線・柳井近く、きらめきが列車を追ってくるかのような水浅黄の海、

東北本線・黒磯近くの祭りのようなセミの声、函館本線・長万部近くの冷え冷えとした磯の匂い。

- - 18きつぷで旅がしたいっ！

一度芽生えた願望は急激に大きく育って、一気に私の頭蓋骨からはみ出そうになった。

もともと机上旅が好きな私である。これまでも何度も、時刻表を広げて

「ええと、枕崎から稚内までは18きつぷを使うと……」

と妄想旅を繰り広げてきた。こと仕事を立て込んでいるときに限ってそれをやりたくなる。

時刻表も地図も読めない友達は、

「よく、そんな細かい数字の羅列読めるよね」

と半ばバカにした口調で言い放ったものだが、私はどんな文庫本よりも時刻表を与えられたほうが暇をつぶせる性質だ。

嗚呼、目覚めてしまった、乗り鉄の血！

私は恋する少女のように、寝ても覚めても18きっぷのことを考えるように……なる暇がないのですぐさま行動に移した。

しているわけではないが、30代の恋も似たようなものだろう。即断即決即行動。当たって砕ける！

といっても、私の場合、仕事が砕けちゃ困るので、まずは、スケジュールを見る。

ま、フリーライターの仕事なんて、パソコンを持っていけば、ネットさえ使えれば、なんとかなるものだ。

といったら語弊があるが、この期間、取材やたまたま大量の資料と格闘したりする原稿がなかったのが幸いした。

ゲラとかの類は、『宿泊先に送ってくれば1時間で返します！』  
と言つといて、色校は、『編集部任せます』。これでいい。

福岡での予定を考えて、これで4日は確保した。

問題は金だ。だが、飛行機で福岡まで帰ることを考えて、同じ値段程度は使つていい、これは自分へのご褒美だと許した。

ときはハイシーズンなので、東京・福岡の航空券はともに買うと31600円もかかる。

つまり31600円程度までは、交通費&宿泊費として使つていいと。



かくして私は、南武線・武蔵新城駅を出発したのだった。

## 1 出発（後書き）

日々薄れ行く記憶との格闘になると思います。

メモなど取らずにぼさーっと旅をしていたので、描写など大甘だと思っています。すいません。

## 2 武蔵新城〜小淵沢

さてと。

18きっぷは買ったが武蔵新城から博多駅までどーやって目指した  
ものか。

昨日遅くまで仕事をやっつけていたので、ロクに荷造りもしてい  
ない。

どうせ持っていくなら最新版がいいだろ、と時刻表も持って来てい  
ない。

こういう場合は。

いつも利用する川崎方面と逆に行ってみるに限る。

そういうことで私は、たぶん初めて、立川方面行の南武線に乗った。

座れん……。

くそ。平日なのに、なんで人が多いんだっ！

私はいきなり後悔した。

やっぱり、今書いてる『君は僕の太陽、月のように君次第な僕』に  
出てくる大磯を通る東海道線を行け、ということだったのだろうか。

私知ってる18きっぷの旅は、もっと優雅だ。

ボックス席1個を一人で占領して、荷物を枕にして『く』の字でお昼ね。

これが18きつぷの旅だつちゅーのに、こんな日常丸出しの人いきれ、やめてくれっ！

やめてくれ！やめ……！

3駅ぐらい来て、ようやく前がぽこつと開いた。

ハア。

座ったとたんに疲れが顔を出し、私は爆睡モードに入った。

別に関東平野の鉄道沿線風景に未練はない。

まだまだ寝たいが立川駅到着。きれいででっかい駅だ。

福岡方面は、選択肢はなく中央線に乗り換えるべきだろう。

おおお、グモツチユーン で有名なあの中央線。

しかしホームの時刻表で確認してみると、ほとんど関東平野を出ない列車ばかりだ。

まだ18きつぷの風情とはほど遠い、通勤列車がハバを効かせているエリアなのだ。

山梨方面まで接続する列車まで15分も待つことになった。

高尾行き。

ボックス席ではなく、窓を背にした通勤車両がつまらん。色気なし。しょーがないのでまた寝る。

寝ぼけていたのでまるで記憶がないのだが、高尾で小淵沢行きに乗り換えて、再び爆睡する。

ふと気がつくと、ボックス席に座っていた。

窓の外にはブロッコリーのような山々が折り重なっていた。

ようやく、生活しかない圏、関東平野を抜けたのだ。

ああ、旅情。

天気はいまいちよくない、白い曇り。だから山はよけいにブロッコリーっぽい色に見える。

しばし、列車旅の風情に浸る。

がたたん、ごとん……がたん、ごとん。

いいなあ。列車旅は。むふふ。

幸せになって、また夢心地になる。

意識がはつきりすると、列車は大月に停車するところだった。

なんでも13分も停車するらしい。

いったん荷物を持って、ホームに下りてみる。

なんか乗り換えがあつたらそっちに行つてもいいという心積もりだった。

大月駅の広くない、新しくないホームに下りたとたん

「えー弁当、釜飯、幕の内」

というしわがれた、でもよく通る声が耳に飛び込んできた。

見ると、手ぬぐいでほつかむりをした、しわくちゃでちっちゃいバアさんがワゴンで弁当を売っていた。

乗客がわらわらとそこへ寄つていつている。

そついや、昼メシ食つてない。

ハッ。

せつかく列車旅つばくなってきたのに、ビール飲んでないじゃん！

休日といつたら昼からビールでしょ！

私は、麻薬ギレを自覚した中毒患者のように鼻息も荒く、

バアさんの後ろにあつたキオスクとコンビニを足して2で割ったよ

うな小さなショップに入り、ビールを買った。

心のゆとりがいつもの『その他雑酒』ではなく本物のビールを手にとらせる。

「このままでいいですかあ」

愛想のいい甲府婦人によるシールもビニールもなくていいか、との問いに。

「ハイ！」だってすぐ飲むもん。

ビールを買ったあとで、ハッと気がつく。時刻表の最新版買おうよ。

私はまた同じ店に入ってしまった。

ビールをビニールに入れてもらえばよかった……と後悔しながら

『私は万引きじゃないんですよ。このビール。今買ったばかりだよ。覚えてるよね……』

とニコニコとわざとアピるように持ち、時刻表を買う。

しかし、時刻表も

「このままでいいですかあ」

と言われ、まったく取り越し苦労だったようだ。

出ると、バアさんの弁当はわずか4つになっていた。その中からつ

まみとして釜飯850円也を買う。

そして、また元の列車に乗ってすぐに発車した。

動き出した列車の窓を夏の雨が斜めに模様を付けた。あたりの山も緑というより青磁色に近い。

しかしあまり覚えていない。というのは動き出すなり私は釜飯を開けたからだ。

ビールのほうは動く前にリップに爪を掛けている。

『容器は、一合のご飯を美味しく炊くことができます』

と包み紙に書いてあったこの釜飯、贅沢にもホンモノの陶器の釜に入っているのだ。

どうりで重いと思った。

具は醤油でつやつやとしたキャラメル色になった皮が付いた鶏肉、真っ黒ではない路の煮付け、シイタケ、竹の子、うずらの卵……

と蓋を開けても色合いが地味なところが、誠実な面構え。

そこに1つだけ黄色く異彩を放つ栗が一粒。



食べてみると、妙に甘くなくさっぱりとしたしょうゆ味、それと固めのくせに味がしつかりついたご飯にとっても好感が持てた。

特に蕎。キャラブキのように黒くない分、蕎っぽい味がかなり残っている。

将じゃないが、うずら卵好きの私は、うずら卵と栗を最後まで残す。

メインディッシュがわりにうずらの卵を、デザートがわりに栗をいただく。

栗は色も異彩だったが味も異端で、ご飯のおかずにはならないから私のようにデザートがわりにするのが模範的な食し方だろう。

しかし、この釜を捨ててしまうのは勿体ないように思え、とりあえず元通りに包んで、カバンに入れる。カバンは時刻表と釜で一気に重たくなった。

腹も満たされた。そしてビールでほろ酔いだ。

車窓にはぶどう棚がたびたび登場している。甲府盆地だ。

しかし、1つのことで満足すると、次に1つ心配事が出てきた。それは

- - 今日の宿、どうするかな。

ということだった。

まだ、仕事が1つあった。それに、『君は僕の太陽……』の今日の

更新分もまだ書いてない。

と、いうことは。

絶対にネット環境が整った宿でないとマズイということだ。

私は、携帯を取り出すと、検索を始めた。

しかし……検索というのは、目的地が決まっていなくても探しにくいものだ、ということを知った。

時刻表の路線図も広げる。

4日間で九州まで行くには、どこまで行けば安心できるか。

いや、まずはネット環境が整ったホテルを探すのが先決だ。

今乗っている列車は小淵沢まで。そのあとは長野行きに接続する。

敗北した田中県知事のくりくりとした目を思い出す。

なんとなく長野。いや、九州を目指すのに長野は行きすぎだろう。

中央線を名古屋方面に行くのが王道だろうが、途中に適当な町は……知らない。

ビジホがありそうな町と思ったら、沿線では松本しか思いつかない。

松本でとりあえず検索してみる。

しかし。携帯の小さな画面で探しているせいか、『お客様の声』の苦情のところばかりが気になってしまい、どれも泊まりたくなくなってしまった。

いつそ、松本から高速バスに乗り換え、高山に行くか。3000円も出してしかも到着は遅いのか……むう。

あれこれ案が飛び出しては消えていく。

うだうだと携帯の画面と、時刻表を行き来しているうちに列車は小淵沢に着いてしまった。

小淵沢では次の列車がくるまで40分以上の待ち時間があつた。

ホームで降りた人は皆、そのまま同じ列車を待っているようだった。新宿方面の列車を待つ人も加わり、小さな駅のホームはしばし人でごったがえした。

ようやく、新宿方面の列車が行ってしまい、ベンチに腰掛けることができた。

また、携帯を取り出して、今夜の宿を探しだす。

気がつくと風がとても涼しい。東京とはまるで違う、高原の風。

子供の頃登った、久住山の涼しさを思い出した。

この涼しさだけで、小淵沢っていいところだな。と思わせる爽快冷涼な風だった。

方針を変えて、今まで泊まったことのあるホテルのチェーンをいくつか検索した。

すると、上諏訪に駅徒歩5分で、ネット環境がよいホテルを見つけた。

上諏訪って知らないけど、と路線図を見ると、小淵沢から6駅めだ。せっかく早めに着くならと、私は上諏訪で降りて、実物の外観を見てから、携帯サイトで予約を入れることにした。

汚かったり遠かったりしたら、また電車に乗って移動すればよい。という考えだ。

なお、サイトから予約すると、朝食が無料でつくというから、これはぜひ付けたい。

ようやくメドがついて、ほっとしたのも束の間、見ると携帯の電池が少なくなっている！

ヤバイっ！

私は、残り少ない電池を温存するために急遽携帯の電源を切った。

携帯の電池問題は、この旅の道中、私をずっと悩ませるのである…

…。

グモツチュイン〓人身事故の2ちゃん語

### 3 小淵沢く上諏訪（前書き）

エロ話があります。お嫌いな人は読まないほうがいいと思います。

### 3 小淵沢へ上諏訪

ほどなく上諏訪に着いた。

ああ、そうか。上諏訪温泉なのだな、と初めて気付く。

上諏訪駅にはタリーズ・コーヒーが入っていて思わずそっちでゆっくりしたくなるが、宿泊マップをもらい、目当ての宿を目指す。

小淵沢と違って、こっちはなんだか暑い。

旅先の暑さって本当にウザい。なぜなら洗濯物が増えるし、歩き回るのもおっくうになってしまうし。

線路を渡って駅の反対側に出ると目当てのホテルは簡単に見つかった。

まだ離れてるけど、まあ、キレイみたいだしいいか、と道端の縁石に座り込んで、携帯サイトから予約を入れる。

アスファルトの熱が尻からじわじわとくる。

さすがにサイトから予約を入れてすぐにチェックインするのもなんだし、と場所だけ確かめるために近くまでいく。

すると、ホテルの目の前には、なんだか瀟洒な古い建物がある。

これも宿かしらん？とのぞき込む。

『片倉館』と書いてあり、どうやら日帰り温泉施設のようだ。

シルク王の片倉さんという人が女工さんのために建てた厚生施設だとか。

現代の建物に比べると、ずいぶん贅沢に見える。

女工といえば、思い出すのは『ああ野麦峠』。

テレビでそれを見たのはまだ小学生の時だったが、遊ばれて孕まされた女工さんが、熊笹の中で出産するから『野産み峠』だ……というくだりがすごく印象に残っている。

温泉に入ってもいいが、まだ荷物も置いてないしなあ、と見渡すと、建物の向こうが開けている。

道路を渡って、行ってみるとそこはやはり諏訪湖だった。

夏の終わり、まもなく夕暮れの諏訪湖の湖面は鈍色の空を映してただ静かだった。

湖畔には誰もいなく、白鳥の形の遊覧船がもう営業を終えたのかぼつんと向こうの岸に羽を休めていた。

予約を入れて30分ぐらいしか経ってないのに、フロントはにこやかに迎えてくれた。



さすが、自社サイトである。

しかも、さすが温泉地にあるビジホ、1階には温泉があるやん！ヤツタ。

とつと仕事しちゃって温泉に入ろうつと！

と嬉々として部屋へ。

で、さっそく仕事すれば、まだ私も感心したものだが……。

こついうホテルで私が手に取るのはテレビの上にある……そう有料放送の案内である。

おお、ここにもあるわあるわ。エッチな放送の案内が。

男性諸氏には珍しくもないだろうが、女子としては大変に興味深いですね。

断言するけど、女子がビジホに泊まったら10人中7人が有料放送を見るね。うん。

さすがに、ビデオショップでエロビデオは借りないけど、ビジホで有料放送は見る。

それぞ女子の実態なり。

まあ、案内だけ見て、いまいちストーリーなどが書いてなくて面白くないので、そそくさと仕事にかか……らないんですね。

一回部屋を出てビールを買っちゃう。

で、ビールを飲みながら、ようやくパソコンのスイッチを入れる。

仕事はあとまわしにして、先に『君は僕の太陽……』を書き始める。

今後のスケジュールのことを考えると、今日のうちに4話ほど書いてしまいたい。

まずは今日の分は最低限。

同棲を始める将と聡のちょっとセクシーな場面をビールを飲みながら書く。

が、どこまでさせるかでつまずく。

まだ先が長いんだよなあ……でもこないだ乳まで揉ませてるしなあ。と頭を抱える。

いっそ全部させて……いやいや、そうしたら後の説得力が……。

と、ものすごく、ものすごく考える。てか、将ばかり『する』方だよな。と思いつく。

いや、実際、セックスって最初のうちは、全部男任せだよな。

でも実際17歳と26歳の付き合いだったら、男ばかりがリードして、女がちよつと活きのいいマグロ程度ってのも、ちよつと女が怠慢じゃマイカ？

と新しい発想が浮かび……お、小説用設定カレンダー見たら、ちょうど聡生理じゃん、と結局あんなことをさせてしまった。

あーあ。純情な読者にはゴメンと謝っとく。

とりあえず2話分書いたところで、腹が減ったことに気付いた。

とりあえず111話だけ投稿して、外に出てみる。

フロントにあったフリーペーパーにあった『黒うどん』とやらを食べにいったと思う。

上諏訪温泉でも旅館が集中している通りにそれを出す店があった。

こぎれいな居酒屋っぽいけど、客は少ない。

金曜なのに、経営は大丈夫なのかな。とも思ったが女一人の身としては客は少ないほうがいい。

カウンターに座り、生ビールと味噌煮込み黒うどん、というのをオーダーする。

全粒粉を練ったために黒っぽいうどん、が黒うどんの正体で、別に諏訪湖特産の淡水イカの墨を練りこんだ……とかそういうのではない。

（あ。ギャグですよ。諏訪湖には淡水イカなんか、たぶんいないです）

凍ったジヨッキで出てきた生ビールが個人的には嬉しく、10分ほど待たされて節分豆を入れる杓のバカでかいやつの中に土鍋がはまって黒うどんがグツグツとお出まし。

生卵が入っている。さらに半熟にしたいので土鍋のフタを閉めて2〜3分待つ。

よし。

おもむろに土鍋のふたをあける。しゃらん、ふわん、と湯気があがり、いい感じに半熟になった卵さんが赤みそダシ汁とネギ、そして絡み合ううどんたちの中にいた。

わーい。いただきまーす！

肝心の黒うどんは味噌ダシにまみれていて、どこが黒なのかよく分からない状態だったが、太目の麺はコシがあって悪くない。

わりと美味しい。赤味噌うどんとは、東京でも九州でも食べられない味だ。

お通し300円が付かなければさらに満足だったのだが、まあよしとする。

ホ口酔いで宿に戻ったら……そうだー、まだ仕事があった……。愕然とする。

比較的好きなことを書いていい仕事なのだが、仕事になるとどうしてこんなに書けないんだろう。

悶絶すること2時間あまり。

途中でもこみちの『レガッタ』が始まる。

もこみちには悪いが、話はまったく見てない。

でも「もこ」がやっぱりイケメンなのと、音楽がいいので、仕事をしながら見るのにちょうどいいドラマだ。

そうこうしながら800Wの原稿をなんとかまとめる。

腹いせに、と言いつつ、ここでついに有料放送を見ることを決意。

幸い、テレビカード販売機は部屋のすぐ斜め前。しかしそこはエレベーターの前でもある。

私はまるで犯罪者のようなスリルを味わいながらテレビカード販売機の前に立った。

エレベーターの位置を確認する。ヨシ。1階にいて動く気配なし。

左右の廊下を確認する。ヨシ。客が出てくる気配なし。

慎重に慎重を重ねて、おもむろに1000円札を入れる……。

カッシャン。

ビクッ！

思いがけない音にあわててあたりを見回す。

どっかのドアが開いたのではないか、と思ったら実は機械が1000円を受け付けた音なだけだった。

ふう。

そんなフaintに3秒ほど時間を無駄にした。気付くとカードが出てきている。

これを見られたら大変だっ！

ドキンドキンしながらカードを素早く抜き取ると、何食わぬ顔をして部屋に戻る。

今日4本目のビールを片手に、有料をオンにする。

……しかし。別にこれをオカズに、なんかするってわけでもない。

純粹に鑑賞してしまった。

まあ、将と聡のセックスを書くことになるので、その参考、という気分もなきにしもあらず。

巨乳の動きとか、自分が持っていないからわかんないしね。

が、あまり参考にならなくてがっかりした。

女があんまり動かないのだ。このマグロ！と叫びたくなった。

いや、動いてるけどお……単に男に動かされているだけ。

本物の魚のマグロでも棒でつつつかれば似たような動きをするに  
違いない。

声だけは盛大に出してるけど、違う。こんなんじゃない。

しかも『家庭教師ナントカ』とかいうタイトルなのに、なんで男優  
がオッサンなんじゃーっ！

（どうやら国家試験を目指しているという設定らしいが）

別チャンネルでは、女がニヤニヤと笑いながら2人の男にSMの緊  
縛をされ、三角木馬に乘せられている。

どうせだったら泣き喚いてくれ。

こんなんだったらSMバーにでもいったほうがもつとエグイものが  
見られる。

私はとても腹が立って、ついにカードの大半を残したまま、一般放  
送に戻した。

しかし。

ああいうビデオにでてくる女優さんはみんな、本当にキレイな体を  
している、と思う。

特にチチとかでつかいしな。でも現実の女性で、あそこまでキレイな体の人ってなかなかいない。

私は温泉が趣味で、よく入りにいくのだが、あんな体の人がいたら、女湯でもバリバリ目立って、皆横目でチラチラ見てしまうに違いない。

ああいうのをバーチャルで見慣れていて、現実の女性に幻滅したりすぐ飽きたりする男性っていそうだからコワイ。

あ、でも女のほうもイケメン慣れしちゃってるから五分五分？ははは。

ちなみに、戻った一般放送では、『黒い太陽』をやっていた。

有料放送よりこっちに出てくる、酒井若菜のほうがよっぽどエロイように思った。

これが終わってやっと上諏訪の湯に憩うことができた、夜半なり。



#### 4 上諏訪く松本く奈良井

上諏訪のビジホの温泉は意外に泉質がよかった。

ぬるぬる系で乾燥肌に優しい系。

気をよくして、寝坊の私には珍しく、少し早く起きて朝風呂も堪能した。

ちなみに女風呂はフロントで鍵をもらわないと入れないシステムになっていた。

きつと不祥事が起きたせいなんだろうなあ、と想像する。

「間違えましたあ」とかいって、ずうずうしく女湯を覗くオヤジとか多そうだもんなあ……（笑）

朝食つきなので、バイキングながらしっかり食う。

しかしだ、私はこの朝食バイキングが嫌い。

はからずも今変換し損ねて『黴菌ぐ』とかになった（笑）けど不潔な感じだから嫌なのだ。

特に、でっかい炊飯器の横に、濁ってふやけた飯粒が浮遊する水の中に浮かっているしゃもじ。あれがキタナイ。

しゃもじ自身にも、すでに取れなくなつたふやけた飯粒が、こびりついていたりして、あれでご飯をよそうのにとっても抵抗がある。

あのしゃもじが浸かっているにこり汁って、温かい炊飯器と何度も往復してるわけじゃないっすか。

つまり、あのにこり汁の温度って30度ぐらいになってると思うんですよね。

てことは、バイキンの繁殖にかなり適温だよなー、とか、いらん想像をしてプルプル震える。

あと味噌汁も長時間の加熱で溶けたようなワカメが浮遊してるのも嫌だし、

もしかしたら、むきだしのおかず類の前で、オヤジが「へーつくしよん！」とかやってたら、と思うとゾツとする。

私が好きな温泉宿で、たった8室なのに朝食バイキングをやっている宿がある。

ここは、ご飯や味噌汁、焼き魚といったものは個別に運んでくれて、煮物やサラダだけをバイキングにしている。

『ヘックション問題』にしても、朝食時間は固定なので、皆が見守る中、バイキングの真上でのヘックションはしにくいムードがある。実際やってる人間も見ることがない。

ま、こっちは安いビジホだからしょーがないんだろうけどさ。

べつだん、メニュー的にも特筆すべきもののない、単なる腹ふさぎ

的な朝食であった。

チェックアウトをして上諏訪駅へ向かう。今日も暑い。

今日は何処へ行くか。何も決めていない。

結局小説もあまり書きすすめなかったので、今日も願わくば、ネットがつかえるところがいいなあ、と思いつつ、上諏訪から列車に乗るなり寝てしまった。

気付くと終着、松本である。工事中だったがまあ大きな駅だ。

松本、かあ。『白線流し』ぐらいしかイメージがないので、駅で情報を収集する。

どうやら、ソバがうまいらしいのと（そうだ、信州だもんね）、松本城がホンモノらしい、というのがわかった。

とりあえず、白壁の建物が並ぶ通りにでもいってみよう、と思って100円バスを待つ。

松本は上諏訪と違ってけっこう涼しかった。

が、待てど暮らせど来ない。

おっかしーなあ、と見た時刻表に張り紙発見。

なんかイベントがあるので、午前中は運休すること。

ええーっ！

んもう！

しょーがないので、歩くことにする。歩くと結構都会の松本、アスファルトの照り返しでかなり熱い。

歩いているうちに、そのイベントにでつくわした。

子供たちの鼓笛隊パレードが車道を占領してやってきた。そして沿道でそれを見守る親兄弟親族一同らしき人々。

あっという間に人・人・人でごったがえしてきた。おまけに大音量のマーチ。

人波をかいくぐりながら、松本に来たことを後悔する。

私が出会いたかったのは、しっとりした風情であって、賑やかさではない。

ああーっ、ウザっ！

私のイラダチとはうらはらに、イベントはますます盛り上がりを見せてきた。

というより私が盛り上がっている方向へ進んでしまっていたのだが。

しかも、太陽までカンカンに照ってきた。

地元民謡での地元民族衣装をつけての踊りとかなら、ヨソ者が見ても楽しめるのだが

私が出つくわしたイベントは残念ながら、まさに

オブ・ザ・ジモティ バイ・ザ・ジモティ フォー・ザ・ジモティ  
のイベントで、地元の人がイキイキと楽しそうに群れる中、体を力  
二にして通りをいくヨソ者の私はなんだか物哀しかった。

ふてくされて腹が減った私は、ガイドに載っていた蕎麦店の1つに  
足を運ぶ。

自家栽培の蕎麦に無農薬野菜の天ぷらというコピーにひかれての来  
店だが、

値段のわりにはソバがいまいちだった。

夏のソバは一番不味い、というのをはからずも検証する結果になり、  
私はますますぶしっつらで松本城へ行ってみた。

あいかわらず人は多いが、ここまで来たら意地である。

入場券売り場で、

「松本城の単品入場券はないんですよ」

といわれ、さらに腹が立つ。博物館とのセット入場券しかないという。

たかだか300円アップであるが、必要のないものの分の金を払うとなると腹立たしい。

が、「せっかくここまで来たんだし」と不承不承金を払う。

考えてみれば、私はこの「せっかくここまで来たんだし」に、今までの人生でいくら無駄な金を払ったことだろうか。

（ちなみに、城のあとで、いつてみた博物館であるが、殺風景で本当にイマイチ、本当に松本城とセットにしないと客が呼べそうになり哀れさだった）

そうこうしてやっと入った松本城は、子供鼓笛隊に占拠されていて、ものすごいことになっていた。

入場券売り場はそれほどでもなかったのに騙された！

本当に前に進めないほどの人、人、人。芝生の上まで人だらけである。

人ごみ大嫌いのあまり、里の祭、博多どんたくも避けてきた私は、死ぬほど、チケットを買ったことを後悔した。

玉砂利の通路が人だらけなので、それをふちどる石の上を飛ぶようにしてようやく天守閣入り口にたどりつく。

なんとか、松本城に入城したときには疲れ果ててしまった。

松本城は、明治維新の廃藩置県の際にも取り壊されなかった、という意味でホンモノの城である。

主は、誰というのが思い出せないほど、コロコロ変わっている。

確か、唐津の小笠原とか、松江の松平（私は不昧公のファン。そういや松江も古くから蕎麦の町だけど、松本にインスパイアされたのかな？）とかもいた気がする。うる覚えだけど。

さてクツを脱いであがる、ホンモノの城内部は、正午ごろにも関わらず、かなり薄暗かった。

……ということは、時代劇などでおなじみの、殿様を囲んで家来が集合するシーンなどは、

当時は電灯もないことだし、そうとう暗がりで行われていた、ということになるんだな、と想像する。

幾層にもなった城内部の最後は、月見櫓である。

松本城の特徴として月見櫓が天守閣にくっついた珍しいつくりが挙げられるが、ここはなるほど他に比べると少し明るい。

しつこい壁に切り取られた窓は、涼しい高原の風を招きいれながら、安曇野の山々を遥かにのぞむ。

ちょうど、私が風に誘われて、窓に近寄ったときだ。

うさぎ 追いし かの山

まるで風の音のような、透き通ったハーモニーが流れてきた。

見ると、芝生の上にいるコーラス隊が、アカペラで歌っているのだ。

まるで、効果音のようなタイミングだった。

城の窓から見る、遥かに緑かすむ安曇野の山。遠く近くに蝉時雨。

『ふるさと』のコーラスはそれら夏の終わりの風景に、思わず涙ぐみたくなるほど似合っていた。

観光客の私には迷惑なイベントだったが、それだけは素晴らしかったので、私は全てを許した。

松本駅に戻った私は、電車を待ちながら、今日の宿を考えた。

私が好きな街に飛驒の高山がある。

時刻表を見ると、遅くはなりそうだが、今日中にそこにたどりつくのは可能そうだ。



高山に行くのを大前提として、携帯で宿を検索する。

するとリニユアルしたての部屋が4300円で泊まれるプランを見つけ、小躍りして即座にそれに決める。

そこまでホームですべて手続きをしまい、中央西線方面の普通列車で松本をあとにした。

乗り継ぎで時間が無駄にあきそうなので、奈良井宿で途中下車予定だ。

幸い、ボックス席を一人で占領することができた。

途中、面白い人が斜め向かいに座った。

紺袴に羽織と、明治時代の『書生』スタイルなのだ。クツは革靴だったけど。

じろじろ見たら失礼だな、とは思ったが、どうしても目が行ってしまふ。

ぼさぼさの黒髪に、色白、神経質そうな細目というのにもかにも『文士崩れ』という感じた。

このヒトがどこで降りるのか、とても興味深かったので、中央西線がどのへんから緑に囲まれたのか覚えていない。

気付くと、線路の両側を濃い緑が覆っていた。

まもなく奈良井に到着した。書生の行く先は気になったが、奈良井で降りる。

時刻表を見ると、たった1時間しか観光時間はないが、奈良井宿の町並みは駅からすぐ始まっていた。

なるほど、こげ茶色を基調とした宿場町の町並みがよく保存されている。

アスファルトでさえなければ、タイムスリップしたようだ。

それにしても暑い。なんでこんな日なばかり歩かされているんだろうか……。

ん？日陰は？

宿場町のメインストリートの端、ちょうど歩くのに気持ちのいい日陰のあたりが工事中であることに、今ごろ気付いた。

しかもアスファルトを切り取る、バリバリというドリルの音が、かなりウルサイ。

それまでは、ゆかしい町並みに気をとられて、気付いてなかったのだ。

なにも、土曜日に工事することないと思うんだが、バカだなー。

と少し腹が立つ。暑いとすぐに腹が立つのがいけない。

とそこへ、街の一角に、湧き水発見。気持ちよさそうにスイカが浮

いている。

ちょうど空になったペットボトルに水を補給するが、その冷たさは、ボトルの外側が瞬時に曇るほどであった。

暑さにまいつていた私は、ペットボトルにいったん汲んだ水を、ノースリーブの肩から腕にかけた。

た、たまらん。

あまりの気持ちよさに、私は何度も自分の腕に冷水をかけまくった。ノースリーブの若い女（私のことだよw）が水とたわむれだしたので、

通行人のジジババが、皆湧き水にニコニコと寄ってきて、我も我もと水を汲みはじめた。

美人は目立って困るな、フツ。

って、『美人』がこんなところで、ぼーっと一人旅してるわけナイダロ〜ッ（笑）

とひとり、ボケと突っ込みを入れるのも一人旅の喜怒哀楽なり。

## 5 奈良井く多治見

1時間しかないので、ロクに茶もできずに、奈良井をあとにする。

結局名物が何かもわかんなかった（ショボーン）。

大学時代にゼミ旅行でいった妻籠も似たような、こげ茶色を基調とした宿場町だったと思うが、

あつちは栗きんとんがバカみたいに美味しくて、ゼミ友達と争うように買ったのを覚えている。

これはゼミ友と再会するたびに出てくる話題ベスト10に入る。

うう。栗きんとん、食べたいなあ。ちなみに正月のおせちみたいなねっとり系じゃなくて、

「栗をそのままくずして固めました」みたいな素朴な栗の味。すっかり酒党になつたいまも懐かしく、思い出せば食いたい。

それはそうと、再び中央西線の鈍行にのりこむ。

あまり深く考えずに空いてる席、空いてる席と歩いて、男性1人で座っているボックス席に会釈して斜め向かいに座った。

奈良井を出た列車は再び、中仙道ぞいの緑濃い沿線に行く。

私は、今日何時に高山につけるかなあと、分厚い時刻表を出して確認した。

土曜の今日は『チャングムの誓い』があるのでこれは見逃したくない。

もし特急1区間とかで時間を効率化できるなら、それをやってもいい、と熱心に時刻表を追う。

……と。

分厚い時刻表を見る私に注がれる熱い視線。

ハッ。

斜め向かいに座っていた男性が私を見ている。

気付いたとたんに、

「あの、18きつぷで旅行されているんですか」

と話し掛けてきた。思い切って話し掛けた感じだが、おずおずとした感じだ。

「ハア」

私が気乗りのしない返事をしたのは、ひとえにその男性の容貌が冴えないのがひと目でわかったからだった（すまんっ！）。

「長時間の列車旅は疲れるでしょう」

なんだか地声なのにファルセットのような声に似合って、

若いんだか、年をとってるんだか、もともと広いオデコなのか、それが後退したものなのか、判別しかねた。

泣きそうなかんじの目はちょっと子泣きジジイを思い出した。

「いえ、べつにー」

そんな私の回答に仲間を得たりと思ったのか、

「どこまで行くんですか？」

と訊いてきた。

「このまま、ついてきたらヤダナー。まさかね。

と用心した私は、

「ええと。九州方面まで」

といちおう嘘ではない答えをいっといた。すると

「僕も、九州までなんですよ」

とちっこい目を輝かせた。

「僕、電車好きなんですよね」

「ハア」

「しょっちゅう乗るんですよ」

「ハアそうですか」

「イベントにも行くんですよ」

と嬉しそうに彼は傍らの紙袋からはみだしていた行き先プレートを指し示した。鉄オタだということははつきりわかった。

「ハア……すごいスね」

私は、ハア、ハアと文面だけ見たら、激しく萌えてる男性が、相撲取りのインタビューみたいな返事をしながら、

悪いけど『空気読んでくれえ』と心で叫んでいた。

ちなみに、『空気嫁』というのは、ふだん私の嫌いな言葉ワースト5に入る単語である。

「空気なんて読んだらロクなことないって！ストレスばっかたまっちゃってさ」

と他人には豪語しているわたくしである。

しかし、それをいま、ここから欲している、自分勝手な自分なのである。

『スマソ（2ちゃん古語）。私は君のエルメス（自意識過剰）にはなれないんだ。だから空気嫁〜』

と心で絶叫しているわたくし。

と、そのとき救いの神が現れた。

途中の駅で乗ってきた地元人らしいオバチャンである。

派手な顔立ちのオバチャンは太めの体を私の前に座らせた。

ふだんだったら、

「ちつ、足置き場が狭くなるぜ」

とハタメイワクな場所であるが、鉄オタクんに辟易している私には女神である。

私は、鉄オタが沈黙した一瞬の隙を狙って、携帯にイヤホンを差し込んだ。

CDからダウンロードしておいた、『小田さんづくし』が耳に流れる。

イヤホンしてれば話し掛けられないだろう。と思いきや。

鉄オタめ、イヤホンをはずさせてまで、いろいろ話し掛けてくる。

おかげで、ジャストシーズンの『秋の気配』が中断されてしまった。

私へのインタビューは終わったのか、こんどは自分語りをはじめおった。面白くない。エンタメ性ゼロ。オチもない。



私は思い切り興味なさそうに相槌を打ったのだが、おかまいなしである。

- - あゝ、もしかして多治見までずっと一緒なのかなあ。

そう思うと少々げんなりした。

イヤホンだけでなく携帯本体をいじくるふりを始めて防御を試みる。

特にみるメールもないので、暇潰しに『小説家になろう』を開く。

タダで小説を読むのは素晴らしい。山の中だというのに携帯の電波が届くのも素晴らしい。

時間はたっぷりあったので、久しぶりに私が大好きな小説である森本エリさんの『水色』を最初から通して読む。

さすがに、こちらが携帯に集中し始めると、こっちに話し掛けるのをあきらめて、鉄オタはオバチャンに話し掛けはじめた。

オバちゃんは、いきなり話し掛けられてびっくりしたようだったがさすがジモティ、心が広い。

満面の笑みというわけではないが、笑み10%ぐらいを浮かべて、相手をしてあげている。

私はそれを見て、少し自分の狭量さに少々自己嫌悪した。

少々、自分語りが過ぎる鉄オタだけど、そこまで無碍にすることもなかったのではないか。

と後悔する。

それにしても、出会いはともかく、あまり積極的にコミュニケーションしたくないな、と思う理由は、

情けないがこのトシになっても『見た目』なのである。

それをまのあたりにして自分の成長してなさにつかりする。

もし、これが。

速水もこみちそっくりの鉄オタだったら。

赤西仁そっくりの鉄オタだったら。

筒井道隆（いきなり傾向違っって？でも好きなんだもん）そっくりの鉄オタだったら。

と想像を試してみる。

『どこまで行くんですか？』

「えっとお、高山本線の高山駅です。そちらはどちらまで？」

『僕も、九州までなんですよ』

「えー、ホントオ！すごーい。どというルートでいくんですかあ

「？」

『僕、電車好きなんですよね』

「きゃー、あたしも！あたしも乗り鉄なんですぅ。私、博多から札幌まで18きっぷで行ったことあるんですよ」

と、声はさっきのようなドスの効いた『姐』のような声ではなく、1オクターブ高く、

すべての語尾にハートマークをつけて訊かれてもないことまでベラベラとしゃべっていたに違いない。

うん、違いない。

結局、面食いなんだなぁ、ハア。

通路側にこっそりため息をついた私は、通路の先に、さっきの袴姿の書生が立っているのを発見した。

……ウソ。

私が奈良井で降りた後、書生さんもどこかで降りて、再びこの列車に乗ってきたようなのだ。

書生さんは、袴姿でドアの近くに佇んで、窓の外をじっと見つめていた。

その視線の先をみて、通り雨が、いま降っていることに気付いた。

山も遠ざかって、雨の中に青田が揺れていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9087a/>

---

茶山びよの18きっぷ旅～2006年夏～

2010年10月12日18時31分発行